

新規殺虫剤導入によるイグサシムシガの防除

農業研究センター い業研究所 栽培部

研究のねらい

いぐさ本田栽培期間におけるイグサシムシガの発生世代は、越冬世代と第一・第二世代であるが、直接的な被害は第一世代が最大で、薬剤防除の中心も第一世代とその発生密度を左右する越冬世代が対象となる。

そこで新規農林登録の殺虫剤を新たに加え、薬剤による防除回数を減らし、防除の効率化を図った。

研究の成果

1. ピリダフェンチオン・CVM P粉剤DL(4kg/10a)は、発蛾最盛期とその後7日目の2回処理で、対象薬剤と同等以上の防除効果を示した。
2. 薬剤処理によるいぐさへの減収は認められなかったが、変色茎の増加が考えられるので、処理の際は、「長い」出芽期を避けて、越冬世代対象の第1回防除に使用するなど、時期の考慮が必要である。
3. 粉剤の流動性が良いので、散布の際は、散布機の開度を一目盛り程度絞り、散布量が多くならないように留意する。
4. イグサシムシガの防除では単一薬剤の連用は避け、第2回防除からは他の薬剤などを用い、さらに、耕種的防除を組合わせた総合的な防除を行う。

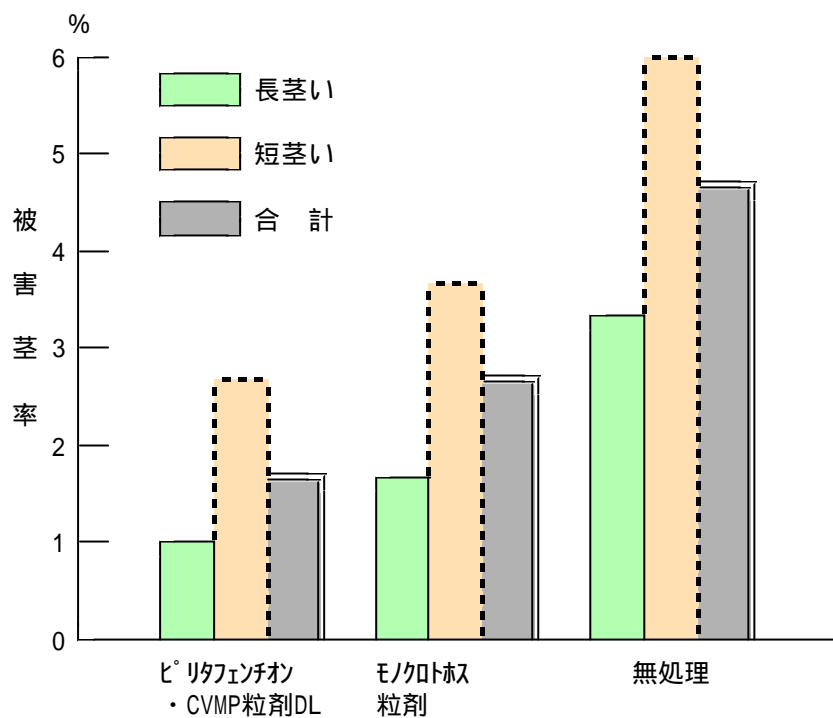


図1 イグサシムシガによる被害茎率(殺虫剤名)

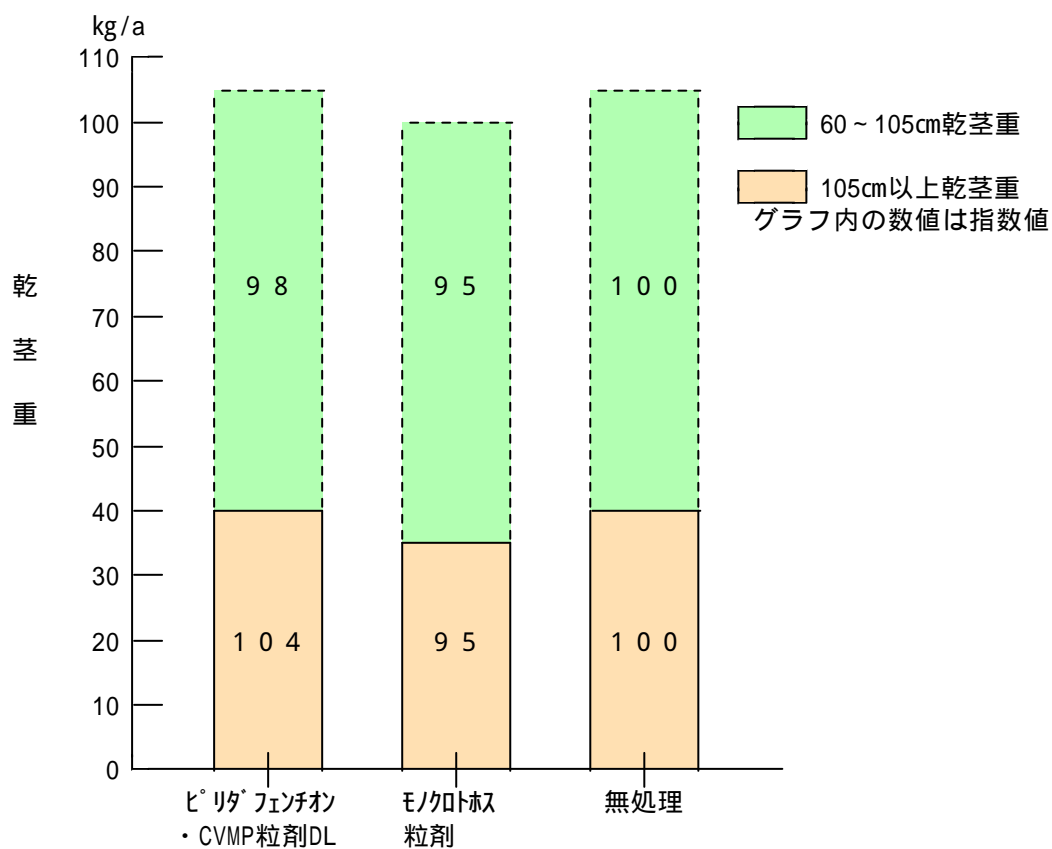


図2 無処理区に対する収量性(殺虫剤名)